
三/年/目2 雨上がりの風に向かって

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三／年／日2 雨上がりの風に向かって

【Zコード】

Z64421

【作者名】

山本哲也

【あらすじ】

雨がきっかけで昔の恋人、中村隆士と再会した瑞貴は、強引な隆士に引っ張り回され、昔を思い出す。しかし、その姿は匠に見られてしまっていた。その後ささいな事から始まった匠と瑞貴の喧嘩は予想もしない方向へ発展する…。『三／年／日』の続編。

始まりは、『櫻』（繪巻物）

『三ノ年ノ田』の続編です。まだ読まれていなの方は『三ノ年ノ田』
からどうぞ。
全17話です。

始まりは、雨。

外は、雨が降っていた。

溜息をつき、鞄から折り畳み傘を取り出すと、瑞貴は憂鬱そうに空を見上げる。

(…雨は嫌いだな…)

掃除当番で少し遅くなつていたので下校时刻のピークがすぎたのか、昇降口に佇む瑞貴の周りには誰もいない。

瑞貴は手にしている茶色地にチエック柄の折り畳み傘を見つめた。その表情は相変わらず憂鬱そうだ。

『どうしたんだよ、傘ねえのか？』

五限と六限の間の休み時間に、とつとつ雨の降り出した鉛色の空を見上げ溜息をついた瑞貴に気が付き、そつ尋ねてきた匠の事が頭をよぎる。

「俺、学校に傘置いてあるの忘れてて、一本余つてるから使えば？」
そつ言いながら匠は鞄の中から紺の折り畳み傘を取り出す。

「ん、うつと、傘は持ってるんだ、ほら」

瑞貴はあわてて鞄から折り畳み傘を取り出して、ぎこちない笑顔を作つてみせた。

「じゃ、どうした…」

「匠に、やーいう時の女の子には何も訊かないのが礼儀だぜ？」
いきなり話に割つて入つた弘樹が、匠の頭にヘッドロックをする。「んが！」止めろつて、おい…

「な、渡瀬？」

ヘッドロックから逃れよつともがいでいる匠を無視して、弘樹が意味ありげに笑つてみせた。

「は、はあ」

どういふ意味があるのか図りかねたが瑞貴は調子を合わせてしまつ。

「ま、あんましひどいよつなら、これを…」

匠の頭を片腕で抱えたまま、弘樹はそう耳打ちをして制服のポケットから小さな銀色の包みを取り出し、瑞貴に手渡した。

「？」

「アスピリン」

キヨトンとした顔の瑞貴に弘樹が言つ。

「…」

弘樹の笑顔の意味が理解できた瑞貴の頬が桜色に染まる。弘樹があの笑顔を見せる時は大抵口クな事がないが、これはひどい勘違いだ。

「あ」

ベッドロックからようやく脱出した匠が、瑞貴が手に持つている物が何か理解つたらしく、顔を赤く染めた。

「じゃ、俺はこれで。匠、あんまし無粋な真似すんなよ」

そう言いながら片手を挙げて一人に挨拶すると、弘樹はふらふらと教室から出ていく。

瑞貴は手に持つている物を見つめてまた溜息をついた。

「…」「、ゴメン。俺…」

「違うわよ」

気まずそうに謝る匠を柔らかく制すと、瑞貴はその包みを匠に手渡し、立ち上がる。

「これ、弘樹君に返しといてね。別に、何でもないから。そういうのでもないし」

「瑞貴…」

「ホントだつて」

匠に微笑んで見せると、瑞貴は歩き出し、一、二歩行つた所で何かを思いだしたように振り返つた。

「ついでに、何でそんな物持つてゐるのか訊いといてね。弘樹君はいつも？」

悪戯っぽく微笑んでそう言つと、キヨトンとした顔の匠を残して

瑞貴は教室を出た。別に、どこかへ行く用があるわけでも、行くあってがあるわけでもなかつたのではあるが、一人になりたかったのだ。不意に、冷たい風が吹き、瑞貴を現実に引き戻す。

(…雨…か…)

もう一度小さく溜息をつくと、傘を広げて降りしきる雨の中を駅へと歩き出した。今日は雨が降る事を予想していたため、自転車ではなく電車で通学していたのだ。

(何で…今頃…)

俯いたままとぼとぼと歩いていく瑞貴は、いつの間にか、再び回想の中に沈んでいた。

専念（前書き）

全17話

再会

それは、今朝のことだった。

朝の天気予報で午後から雨が降る、という予報を聞いた瑞貴は、自転車通学を諦め、サラリーマンやOL、制服姿の学生達で込み合ったホームで電車が来るのを待っていた。

（…あーあ、混んでるし、たまに痴漢がいるんだよな…この時間…）

憂鬱な気持ちで駅の時計と列車案内を見比べる。あと三分程で電車が来るはずだった。前にも後ろにも、何人もの人が並び、音楽を聴いたり、本や新聞を読んだりとそれぞれの時間を過ごしている。どことなくせわしない空気が辺りを支配していた。

瑞貴は待たされるのも、人混みも、そしてこのせわしない空気も嫌いだった。あまり近いとは言えない学校に、自転車で通っているのはそのためだ。

（早くしてよね…。つたくこれだから…）

「間もなく、四番線に…」

ややあって、電車の到着を知らせるアナウンスが流れ、電車がホームに入ってくる。その時の風で瑞貴の長い髪がさらさらと揺れた。（自転車じゃなくてもまとめとくんだった…）

風に舞つた髪が顔にかかり、瑞貴はそれをうつむかせ手で直した。

ドアが開き、降りる人たちが一団となつて降りていく。瑞貴が利用している駅は乗り換えに利用されることが多いため、かなりの人が降りるのだ。

「瑞貴？」

不意に、後ろから声をかけられ、瑞貴の心臓が鼓動を一回飛ばしてしまった。

（え…？）

それは、懐かしい声だった。そして、もう聞くことはないと思つていた声だつた。心臓の鼓動がやたらと早くなつてゐるのを感じながら、恐る恐る振り返る。

そこには短めの髪をウエットに仕上げた浅黒い肌の体格の良い若い男が立つていた。男はジーンズにTシャツという無造作な格好をしているが、決して野暮つたくはない。それなりに洗練された着こなしをしている。

「君、渡瀬瑞貴、だよね？」

男は確認するようにそう尋ねる。まさかとは思つたが、その声にはやはり聞き覚えがあつた。

「先輩…？」中村・隆士先輩…？」

瑞貴は自分の記憶と男の姿との共通点を探すかのように、男をまじまじと見つめる。

「やつと思いついたか。…久しぶりだな。今から学校？」

「…う…は、はい…」

『うん』と言いつこうになつた所を、瑞貴は言い直した。胸がきゅつと痛む。もつ忘れたと思つていた痛みだ。

「…えらいく他人行儀だな…」

そう言つて隆士は自嘲気味に笑つ。また瑞貴の胸が痛んだ。

「瑞貴、俺…」

なおも何かを言おうとする隆士から逃れるように、瑞貴はそそくさと電車に乗り込む。

電車が走り出してホームから出でしまつまで、瑞貴は隆士の方に背を向けたまま一度も振り返らうとはしなかつた。

「瑞貴」

校門を出でいくらも行かない所で不意に呼び止められ、瑞貴は現実へと引き戻される。だが、まだ回想の中にいるような気分だつた。呼んだのが他でもない隆士だつたのだ。

「…どうして…」

驚いた瑞貴はそれだけ言つのが精一杯だつた。隆士はまたあの自

嘲気味な笑顔を見せ、瑞貴の前に立つ。

「その制服ならどこの学校かすぐにわかるわ。地元だからな」「どう…したの…？」

「…」

「さあ、さあ」さくなく答える瑞貴に、隆士は肩をすくめてみせる。

「「」挨拶だな。久しぶりの再会なのに」

「…」

瑞貴は顔を逸らした。そ

「さて、と。俺の傘は少々水が漏れてね。そっちに入ってくれよ」
そう言いながら隆士は自分の持っていたビニール傘を置み、瑞貴のさしてこいる小さな折り畳み傘に入り込む。狭い傘から一人の肩がはみ出し、雨に濡れた。

「ち、ちよつと、定員オーバーよ。肩が濡れちゃうじゃない」

「懐かしいな。昔、こいつやって帰つただろ」

隆士は瑞貴の言葉を無視して言つた。

「…」

「あ、行こうぜ。駅はこっちだろ」

瑞貴の気持ちなど構になしに明るくさう言つと、隆士はポン、と瑞貴の肩を叩き、歩くように促す。

「…調子がいいのね、相変わらず」

瑞貴はあきらめたように一つ溜息をつくと、駅に向かって歩き始めた。

同じ頃、匠と弘樹は雨の中、駅の近くの繁華街を歩いていた。学校の最寄り駅は駅ビルもあり、デパートなどがそれなりに立ち並んでいるため、匠たちは学校帰りに良く寄り道をして行くのだ。

「おい弘樹、まだ行く所あんのかよ」

「まあそうカリカリしなさんなつて」

いい加減イライラしている匠の問い掛けに、弘樹は曖昧な笑顔でいい加減イライラしている匠の問い掛けに、弘樹は曖昧な笑顔で答える。

何でよりにもよって雨の日などにあちこち買い物に回るのかと匠は思う。しかも、弘樹のは所謂ウインドウショッピングというやつで、別に何か目的があつてのことではないらしい。匠は自分もちょうど寄り道をしていく予定があつたので、弘樹の誘いに気軽に応じてしまつた自分を後悔していた。

と、不意に前を歩いていた弘樹が匠を連れて飛び込むように近くの物陰に入り込む。

「お、おい！ 何だよ急に…」

「しつ！」

いきなり襟首を掴まれ引っ張り込まれた事に抗議する匠を弘樹は鋭く制した。そして、緊張した面持ちで物陰から歩道を窺う。連れるよううに匠も物陰から顔を少しだけ出して弘樹の見ている方を見た。

「！」

匠は息が詰まる思いがした。瑞貴が、何だかスポーツマン風の男と相合い傘をして歩いていたのだ。

瑞貴達は雨の歩道をこちらに向かって歩いてきていた。男の方がしきりに何かを話しかけ、瑞貴は時々少し笑つたりしながらそれに答えていた。

少し寂しげな、何かを懐かしむような切なげな微笑み。

匠はそんな瑞貴の顔を今まで一度も見たことがなかつた。
近いと思っていた瑞貴との距離が急に果てしなく遠く感じられる。
胸が、痛い。

『だ、だつて、好きでもない奴と友達になんかならないでしょ？

普通』

(…そういうことなのか…?)

以前、花火大会の時に瑞貴が見せたぎこちない笑顔。

あの時の瑞貴の反応にはいくら何でも腑ふに落ちないものがあつた
のだが、その訳が今、判つた気がした。

「おい見てみろよ、あの男、ちゃんと自分で傘持つてやがるぜ」

匠たちに気づかずに通り過ぎていく一人の後ろ姿を見送りながら
弘樹が促すが、その声は匠には届いていなかつた。

「…りや？ 匠？」

二人の後ろ姿を見送つたまま固まつてしまつてゐる匠の顔の前で
弘樹がブンブンと大きく手を振つてみせる。

(…瑞貴…)

だが、それさえも匠の目には入つていなかつた。いつまでも、胸
が締め付けられるように痛い。

駅に着くと、瑞貴は傘を置んだ。同時に、今まで自分が隆士のペ
ースに乗せられていた事に気が付く。

(…今更…)

瑞貴は微かに溜息をついた。

「どうしたよ」

それを敏感に感じ取つた隆士が尋ねる。

「あたし、やつぱり…」

「ストップ。それは言いつこなし」

一息に捲し立てようとする瑞貴の唇に人差し指をあて、隆士が制
した。

「…でも…今更やり直すなんて…」

瑞貴は俯いて、絞り出すようにやつとそれだけ言つ。

「やり直す？ 続きから始める、の間違いだろ」

「…」

隆士の言葉に、瑞貴は何も言えなかつた。

「じゃ、明日、このくらいの時間にここで待つてるぜ」

それだけ言つと隆士は改札の方へ歩いて行つとする。

「そんな、勝手に…」

「勝手なのは俺の専売特許だろ。それから、やっぱおまえはその怒つた顔の方がいいぜ」

顔を上げて文句を言おうとした瑞貴にウインクしてそう言つと、隆士はそのまま猫のようになんやかに人混みを抜け、自動改札をくぐつて見えなくなつていつた。

その夜、瑞貴は中学時代の夢を見た。

「先輩、遅ーい」

中学校の昇降口でちよこんと佇んでいたブレザーブレザーブレザー姿の瑞貴が、やつて来た同じ制服姿の隆士に拗ねたように口をとがらせて抗議する。

「悪い悪い。ちょっとガミガミ屋の先生に捕まっちゃって」

隆士は笑いながらそう言って肩をすくめてみせ、それから外を見て続けた。

「おまけに雨まで降つてるとはね、やっぱ今日はついてねえな」「じゃーん。何とここに傘があるのです。用意がいいでしょ?」

田をきらきらさせ、悪戯っぽく微笑んだ瑞貴はそう言って後ろに隠していたクリーム色の傘を隆士に見せる。

「へえ、じゃ、入れてくれるわけ?」

隆士が悪戯っぽく微笑んだ。

「うーん、待たせたお詫びに傘を持つてくれるなら、考えてもいいかな」

瑞貴は腕を組んで小首を傾げる。

「オーケー。持たせていただきましょ、お姫様」

笑いながらそう言つた隆士は瑞貴から傘を受け取る。そして、二人は一つの傘に寄り添つて雨の中を帰つていぐ。

「…やっぱ、この傘じゃ小さかったかなあ」

暫く歩いたところで瑞貴は傘からはみ出して濡れてしまつてている隆士と自分の制服の肩を見て呟く。

「もつとくつつけば大丈夫だ」

そう言つと、隆士は瑞貴の肩に手を回し、ぐいっと自分の方に引き寄せた。

「きやつ」

急に引き寄せられた瑞貴は小さな悲鳴を上げるが、すぐに笑

顔になつて言ひ。

「もう、先輩、図々しいんだから

「誉め言葉と受け取つておくよ」

隆士はそう言いながら肩をすくめるみたいな仕草をする。

そこで、瑞貴は夢から目覚めた。

枕許の時計を見ると、まだ一時間ほど余裕がある。普段ならもうろんまた寝てしまつところではあるが、今日はふと気になつて洗面所に行って鏡を見つめた。

寝起きのぼんやりとした顔。よく乾かさないで寝てしまつので激しい寝癖のつこつこする髪。いつもは時間がないので適当に梳かす程度で不問に付してしまつたのだが、あまり人に見せられた姿ではない。（たまにはシャワーでも浴びよつかな…時間もあるし…）

そう思いながら瑞貴は居間の時計を見る。

（…時間があるから…）

暫く時計とにらめっこをしていたが、結局、シャワーを浴びることにした。

「何だよ、塗さないで来たのか？」

席に着いた瑞貴を見て、匠が怪訝けげんそうにそう尋ねる。

「え？ ど、どして？」

何でそんなことを訊くのだろうかと不思議に思い、瑞貴は訊き返した。

「髪がしめつてるぜ」

匠が瑞貴の髪を指をしてそう答える。瑞貴はほつとした。朝、シャワーを浴びてきたので髪がちゃんと乾いていなかつたのだ。

「…朝、シャワー浴びたんだよ」

匠がどんな反応をするか予想がついていたのと、どうしてそんなことをする気になつたのかが嫌になるほど分かっていたので瑞貴は決まり悪そうに答えた。今日に限つてどうしてそんな事をしたのだろつ。やはり、しなければ良かったと瑞貴は思った。

「私は暫く信じられない、と云ひよくな顔をしていたが、やがて、
「ふうと…」
とだけ言つとそっぽを向いた。きっと『それで今日は雨なのか』
などと言われると思つていた瑞貴は少し拍子抜けする思いだつた。
その日の私は何故かよそよそしこよつに瑞貴には思えた。

夢（後書き）

全17話

デート？

そして、放課後。
昨日、強引に約束をせられた場所に行くと、隆士はひやんと待っていた。

「よひ、来たな」

瑞貴を見つけた隆士が片手を挙げて近づいてくる。
「そっちが無理に約束させたんじょ」

呆れ顔で瑞貴は答えた。

「手厳しいね。ま、退屈はさせませんって」

苦笑いしながら隆士が言つ。

「で、どこに行きたい所がおありますか？」
我が儘なお姫様？
胸に手を当てて恭しく言つた隆士に、思わず瑞貴は吹き出してしまつ。

「ホント、変わんないのね」

「誉め言葉と、受け取つておくれ」

そう言いながら隆士はウインクして見せた。

それから暫く後、あちこちびらぶら見て回つた一人は喫茶店でコーヒーを飲んでいた。隆士は昔以上におじけていて、笑いすぎた瑞貴は少し疲れてしまったほどだ。

「いや、瑞貴とデートするなんて、久しぶりだよな」

湯気の立つ白いコーヒーを片手に、何気なく隆士が言つた。
(デート…)

その言葉が、ふと、瑞貴の心に引っかかる。

「どうした？」瑞貴

そんな瑞貴の様子に気づき、隆士がキョトンとした顔をする。

「う、うつと、何でも」

瑞貴は慌てて誤魔化し、コーヒーを一気にあおる。
「あ、おー…」

隆士が何かを言おうとしたが間に合わず、熱い液体が瑞貴の口の中と喉を焼く。

「……！」

「……あは

慌ててコップの水を飲み干す瑞貴を、呆れた様子の隆士が見つめ、笑う。だが、瑞貴は暫く抗議する余裕がなかった。

「じゃーな。お大事に」

ワインクして電車を降りていく隆士の背中を瑞貴は無言で見送る。隆士は瑞貴より少し手前の駅を利用してくるのだ。

（これで……いいの……？）

電車が走り出すと、瑞貴はそつと目を伏せ、そう自問する。心中では、再び『デート』と言つ言葉が引っかかっていた。

確かに、隆士と一緒にいて楽しかった。昔に戻ったような気さえしたのだ。しかし、それでいいのだろうか。また、昔のようになるのではないか……。

瑞貴は、あの日以来、『友達』ではなく『恋人』として誰かと付き合つ勇気を失くしたままでいる自分の事を、分かっていた。

ふと気が付くと、電車の窓に雨粒が幾筋もついている。また、雨が降り出していた。

翌日もまた、雨だった。

（今日は……早く帰ろ……）

昼休み、自分の机に突つ伏して瑞貴はそう思つていた。

どうしても、『デート』という言葉が瑞貴の心に刺さつたまま抜けなかつた。少し、心の中を整理してみたい、とも思つ。（するいよね……）

瑞貴は自己嫌悪に陥つていた。

「……はあ……」

「どうしたの？ 瑞貴」

「……」

知らず知らずのうちについていた溜息に気が付き、近くを通りかかった友達の斎藤珠美が声をかけてくる。小柄だがショートカットのよく似合う珠美は活動的で男勝りな所があるので、ちょっとお節介でもある。

「ん…何でもないよ。ちょっと、慣れない電車通いしたら疲れちゃつて…」

けだるげにゆっくりと体を起し、ぎこちない笑みを浮かべながら瑞貴は答えた。

「こりん所はつきりしない天気が続いてるもんね。何かこう、みんな鬱々《うつうつ》とした顔してる。かく言つあたしもだけ」

そう言つて珠美は悪戯っぽく笑う。

「あ、所で、匠君の仲間の腐れ外道、どこ行つてるか知らない？」

珠美はそう言いながら瑞貴の左隣の机、つまり匠の机をトントンと叩く。珠美は弘樹のことを嫌つていて、滅多に名前では呼ばずに、いつも『腐れ外道』だとか『女の敵』などと言つのだ。

「弘樹君？」

「そう。あいつ、今日の口直のくせに、あたしに全部押しつけてどこか行つちゃつて。つたく…」

それから、耳打ちするように身を乗り出し、付け加える。

「そう言えば今日は瑞貴のオプションの姿もあんまり見かけないよね」

瑞貴のオプションというのはもちろん匠のことだ。珠美は時々そういう言つて瑞貴をからかうのだ。

「…止めてよ、その言い方」

疲れたように瑞貴は言つた。

「ゴメーン。でもさあ、匠くんつて…」

「止めてつてば！ あたし、そんな風に見られたくない！ 別に匠なんてどうだつていいんだから…！」

ニヤニヤと笑いながら耳打ちするように話しかけてくる珠美を鋭く遮ると、バンッと立ち上がった瑞貴はそう一息に捲し立てる。そ

の剣幕に驚いたのか、珠美はぎょっとしたような顔をする。瑞貴は自分が珠美にハツ当たりしていたことに気が付き、ハツとした。

「あ、『』、ゴメン、あたし…」

だが、珠美がぎょっとしたような顔をしたのには別の訳があった。

匠が、無言で自分の席に座つたのだ。

キーンーコーンカーンコーン…。

最後の授業の鐘が鳴り出していた。

テート？（後書き）

全17話

すれ違ひ口口口

『あの男の正体、判つたぜ』

匠はさつきの休み時間に弘樹がそう言つたのを思い出していた。弘樹は無理矢理に匠を購買への買い物に付き合わせ、その道すがらそう切り出したのだ。どうやら、購買への買い物というのはただ匠を教室から連れ出す口実だつたらしく、暫く歩いた所で弘樹は立ち止まつた。

「き、興味ないよ」

そう言つと匠はまた歩き始める。

「まあそう言つなつて。あの男、どうやら渡瀬の中学の時の先輩らしい。中村隆士、今は大学生らしいな」

スタスターと早足で歩く匠に追いすがり、耳打ちするように弘樹は言つ。

「…で？」

「…それだけだけど。…興味ないんじやなかつたのか？」

歩きながら先を促す匠に、弘樹が呆れたよつた声で答えた。

「…無いよ

俯いて咳くよつに答える匠に、弘樹は大げさに肩をすくめて見せる。

「ウジウジするくらいなら、いつそスペツと言えばいいだろ。『瑞貴、好きだ』って」

「…言つたよ」

拗ねたように咳く匠。

「この前のアレ、か？」

弘樹が馬鹿にするよつに匠を見た。

「誤解されたんだろ？ つて事は言つてないと同じじやん」

「でも…」

「瑞貴には他に男が、か」

匠が心のどこかで感じたまま、言葉にしていなかつた事を、弘樹が先に語つ。匠ははつとして弘樹の顔を見た。

「まだそつと決まつた訳じやないんだろ。それ」「…」

弘樹は言葉を探すように一瞬口をつぐむ。それから、今度は妙におどけて続けた。

「例えそつだつたとしても、言わぬいより、言つてしまつた方がいいぜ。言わぬまま終わらせると、いつまでも未練が残るからな」「…経験済みつて訳か」

匠の言葉に、弘樹は大げさに肩をすくめてみせた。

「さあね。ま、後はお前さん次第、好きにやんな」

「…つまり、この頂点に対する…」

気が付くと、初老の先生が黒板に図を書きながら何かを説明している。匠はなるべくそのことを思い出すまいと、カリカリと普段は口クに取りはしない板書を取る。

『だ、だつて、好きでもない奴と友達になんかならないでしょ？

普通』

そう言つた瑞貴の顔がふつと頭をよぎり、ぱきりと首を立ててシャープペンの芯が折れる。匠は微妙に溜息をつくと、カチカチと芯を出し、再び板書に没頭しようと試みた。

（…参つたなあ…）

瑞貴は匠の姿をちらりと盗み見る。匠はまるで自分の席の右側は壁だ、とでも言つようこ、瑞貴の方を一顧だにせず、黒板を睨み付けている。珠美との会話を匠に聞かれていたのは明白だし、匠が怒つているのもまた、明らかだつた。

（…どうだつていい、は言い過ぎだよね…謝らなきや…）

そういうしている内に、授業が終わる。

「匠…」

学級委員の号令で挨拶をしてから、帰り支度を始める匠に瑞貴はそう切り出した。

「…」

匠は無言で顔をわずかに向けただけだった。その冷たい視線に、瑞貴はカツとする。

「…何怒つてんのよ」

謝るうつと思つて開いた口から出た言葉は全く違うものになつた。

「別に」

短くそう答えると、匠はふいと顔を逸らし、また帰り支度を始める。

「大人げないよ、匠。あのくらい…」

「大人げなくて悪かつたな。そりや俺はおまえの先輩じゃないからな」

売り言葉に買い言葉でつい匠はそう口にしてしまつ。言つてからしまつたと思ったが、もう手遅れだつた。

「！？…匠…見てたのね！」

「あ、い、いや…」

「匠なんて大つ嫌い…！…顔も見たくない！」

パツシーン！

派手な音と共に瑞貴の平手打ちが匠の頬を襲つた。そして、瑞貴はそのまま鞄を持って駆け出していく。後には呆気に取られた匠やその他の生徒達が残されていた。

外では、雨がぽつりぽつりと降り始めている…。

空回りする想い

瑞貴の平手打ちによつて凍り付いた空氣からようやく醒め始めた教室に残つていた生徒達の内、好奇心に勝てなかつた何人かは、祟りを恐れるようにちらちらと匠の方を見ていた。それ以外の者はいたたまれないのか、用を済ませるとそそくさと教室から出でていつてゐる。珠美は前者の方だつた。

匠はまるで『呆然』というタイトルの彫像にでもなつてしまつたかのよう、にいつまでも立ちつくしている。

（…ヤツバ…もしかしてあたしのせい…？）

立ちつくす匠を見つめ、珠美は罪の意識にさいなまれていた。元はと言えば自分が余計なことを言わなければ…。

（…あの一人が喧嘩するなんて…）

なぜだか珠美は自分の事のように悲しく思えてくる。

「さて、と」

そう言つて弘樹が立ち上がり、教室を出て行くとするのが珠美の目に入った。

「あんたのせいよつ…！…この腐れ外道…！」

廊下に出た所で弘樹に追いついた珠美はそう言いながらぽかぽかと弘樹を叩く。弘樹は何のことだか分からぬようだ。

「いてて！　おい、何すんだよ！」

「あんたがちゃんと日直の仕事しないから瑞貴が喧嘩するんじゃない！　責任取れ！」

ぽかぽかと弘樹を叩きながら珠美は涙ぐんでいた。

「はあ…？　どういう関係があるんだよ…！」

「あんたが…」

「止めてくれよ…」

弘樹を叩き続ける珠美を制したのは、匠の鋭い声だつた。

「匠君…」

いつの間に来たのか、匠は珠美達のすぐ後ろに来ていた。多分、珠美の声を聞きつけたのだろう。

「…止めてくれよ。別に…何でもないから…」

俯いた匠は暗い声で絞り出すように言つ。その右手が強く握られていることに、珠美は気が付いていた。

「…でも…」

何かを言いかけた珠美の肩を弘樹がポン、と叩く。『止めろ』と言つ意味だ。

俯いたままふらふらと教室へ戻つていく匠を、珠美は無言で見送る。寂しげなその横顔はまるで泣いていたようだつた。

「…どうするつもり、腐れ外道」

匠が行つてしまつと、珠美は小声で後ろに立つていてる弘樹に尋ねる。

だが、弘樹からの返事はなかつた。

「ちょっと？」

訝しく思った珠美が振り返ると、そこには誰もいない。ただ、遙はる

か遠くの方を走つていく弘樹の後ろ姿が見えた以外には。

「…あの腐れ外道ーーつーー！」

そう叫ぶ珠美の声だけが、廊下に空しく響いていた。

雨に濡れて

(…ひどいよ…匠…)

瑞貴は雨がぽつぽつと降り始めている中を傘もささずに泣きながら走っていた。そんな瑞貴をすれ違う人達が怪訝そうに振り返つて見送る。

暫く行った所で瑞貴はようやく立ち止まつた。そして、制服の袖でぐいと涙を拭うが、その頃には涙は雨と混じつてどつちがどつちだか分からなくなつていた。鞄の中をあわると、入れ忘れたのか茶色の折り畳み傘は入つていなかつた。

短く舌打ちして、瑞貴はまた走り出す。また通り過ぎる人たちが振り返るが、瑞貴はそれを無視した。とにかく今は何かをしていたかつた。何かをすることによって匠の事を忘れたかつた。

「どうしたよ、一体?」

濡れながら走ってきた瑞貴を見て、隆士は目を丸くする。何かを言えば泣き出しそうで、瑞貴は何も答えずにただはあはあと肩で息をしていた。

「…傘、持つてなかつたのか」

暫く何かを探るように瑞貴を見つめていた隆士はやつぱりと鞄からハンカチを取り出し、瑞貴の顔や髪を拭いていく。

「制服も濡れてるじゃないか。このままじゃ風邪ひくぜ。どつかに見つめる。

…

瑞貴の姿を見つめていた隆士がそう言いかけた所で瑞貴はびくつとなる。そんな瑞貴に気づいた隆士はふつと自嘲気味に笑つた。

「…風邪ひかないうちに帰れよ、今日は」

瑞貴は、胸の痛みを堪えているような、少し寂しげな顔で隆士を見つめる。

「どうしたんだよ、そんな顔しやがって」

笑いながらそう言つと、隆士はぱしゃと軽く瑞貴の頬を叩いた。

「何してんだ、風邪ひくだろ。早く帰れよ

「…うん」

田を伏せて頷いた瑞貴は改札へ向かつて歩き出す。

「瑞貴」

不意に、隆士が瑞貴を呼び止めた。俯いたまま、瑞貴が振り返る。

「…いや。何でも

短めの髪をかき上げて隆士はわざと離れた。

「…うん…」

瑞貴はぐるりときびすを返して歩き出す。

（…あの時は、悪かったよ…）

隆士はその後ろ姿を見送りながら、またふつと血潮氣味に笑つて
いた。

甦る、過去

翌日、瑞貴は風邪をひいて学校を休んだ。熱が高く出て、元々平熱がそれほど高くないので一発で参ってしまったのだ。

自分の部屋のベッドで横になり、ぼんやりと天井を見つめる。熱のせいか、頭がぼーっとしていた。

（…風邪ひいて、学校休むなんて久しぶりだな…）
ぼんやりとそんなことを思う。

この前、風邪で学校を休んだのはいつのことだったろうか。
再び眼眩がして、瑞貴は目を閉じる。そして、いつの間にか浅い眠りに落ちていった。

放課後、部活を終え、帰り支度を済ませた瑞貴が昇降口へ行くと、制服姿の男子生徒がしとしと雨を落としている鉛色の空を見上げ、悪態をついていた。

「ち…ついてねえな、雨かよ」

（！ 中村先輩…）

瑞貴にはその男子生徒が誰だか直ぐに分かった。隆士だ。瑞貴達より一学年上の隆士は、女子生徒達の人気が高い。瑞貴も、幾度となくその背中を田で追い、あこがれていた者の一人だった。

隆士はこのまま濡れて帰ろうかどうしようか迷っているようだ。

「先輩…あの、良かつたらどうぞ」

暫く隆士の姿を見つめていたが、やがて瑞貴は、恥ずかしそうにクリーム色の傘をさしかける。

「…いいの？」

隆士が少し驚いたような顔で緊張した面もちの瑞貴を見つめる。

「は、はい！」

そう答えた瑞貴の声はうわずっていた。

「でも、方向が一緒なわけ？」

「あ……」

言われてから瑞貴は初めて隆士の家の方向など知らないことに思
い当たる。

「で、でもっ！ あたし、大丈夫ですからっ……」

一息に瑞貴はそう言った。心臓は早鐘のように打つていて、とも
すれば舌がもつれてしまいそうだ。

「じゃ、そこのコンビニまで送つてよ。そしたら、傘買えるから。
えっと……君……」

「わ、渡瀬、瑞貴ですっ！」

「さんあゆ。渡瀬さん」

そう言つて隆士はにっこりと微笑む。瑞貴は頭が半分ぼーっとし
て、何だか足が地面についていないような気さえした。

瑞貴はそこで浅い眠りから目覚めた。

「……雨なんて……嫌い……」

そう呟いた瑞貴の目にいつの間にか涙がたまっていた。
じりりと寝返りを打つて枕に顔を埋めた瑞貴の耳に、雨の音が聞
こえてくる。どうやら、外ではまた雨が降り出しているようだった。

匠とのことがあつたため、瑞貴が学校を休んだ事が投げかけた波紋は意外に大きい。

『喧嘩が原因で寝込んだ』

『病気ではないが匠が謝るまでは学校に来ないつもりだ』

『などという他愛のないものから、果ては

『自殺未遂をして入院している』

といつた女性週刊誌張りのものまで、クラスには様々な憶測と流言が飛び交っていた。

「…ねえ、知ってる？…あの一人…」

昼休みになり、囁き声で交わされている会話を、自分の机に頬杖をついて座っていた匠は表面上は無視していた。だが、話に熱が入つてボリュームが上がつてしまつのか、時折漏れてくる話の内容や、話し手である女子生徒たちのちらちらと匠を窺う好奇心にあふれた視線で話の大まかなところの予想はついている。

だが、別に面と向かつて何か言われたわけではないので反論のしようがないのだ。

(…勝手なことばっか言いやがつて…)

何か直接言つてくれば反論してやれるのに、と匠は思つていた。

「ねえ、藤代君…」

さつきまで教室の脇で集まつて何かひそひそ話をしていた女子生徒の一人が恐る恐る、まるで猛獸にむかつて近づいて行くようにしながらそつ声をかけてくる。

「…何？」

匠はきつと顔を上げてその女の子を睨み付けた。いや、匠本人にはそのつもりはなかつたのだが、自然とそんな表情になつていたのだった。

「…ごめん、やっぱ、何でもない…」

引きつった笑顔でそう答えると、その女子生徒はそそくさと元いた集団へと帰つて行く。その生徒を固唾かたずをのんで見守つていた他の女子生徒達が、一斉に匠の方から視線を逸らした。

（…つたく…何なんだよ…）

その原因が自分の表情にあるとはつゆほども思わない匠は、その後ろ姿を目で追いながら膨ふくれていった。

「おいおい匠、何て顔してんだ？」

教室へ帰つてきた弘樹が、匠の顔を見るなり一やけた笑いを浮かべて言つ。

「何がだよ」

匠は短くそう答えただけだった。

「あのなあ、ハつ当たりは…」

「やつと捕まえたわよ、この腐れ外道…！」

前髪をかき上げながら何かを言おうとした弘樹を、珠美の声が制止した。

「げ、齊藤…」

「逃げようつたつてそろは行かないわよ」

慌ててくるりと一百八十度進路変更した弘樹の制服の襟えりを掴んで珠美が止める。

「…はは…デ、デートの予約なら今日は先約が…」

「馬鹿言つてんじやないわよ！ この腐れ外道…！」

パツシーン！

教室に派手な平手打ちの音が響き渡る。

「…あたしはねえ、あんたのそういうふざけた所が許せないの！ どうしてもつと真面目になれないのよ…？」

珠美は一息にそう言つと、今度は匠の方に向き直る。

「匠君も匠君よ！ あのまま瑞貴を放つぽつておくなんて…」

急に矛先が自分に向いてしまつた匠は、珠美の剣幕に押されてキヨトンとした顔をするだけで何も言えない。

「好きなんでしょう…？ 瑞貴の事…」

匠の心臓が鼓動を一回飛ばした。まさか、珠美からそのよつなことを言われるとは。

「……い、いきなり、何言つてんだよ……そんなわけない、だろ……」
胸が痛い。匠の言葉の最後の方は喉くような声になつていた。

「嘘！」

頼りなげな匠の言葉を珠美はたつた一言で軽く一蹴する。

「誰でも知つてゐるわよ……そんな事！」

匠は眼眩に似たものを感じた。匠の瑞貴への想いを知つていてのは弘樹だけだと思っていたのだ。珠美にそれを言われた事もショックだつたが、『誰でも知つてゐる』とは…。

「ねえ、喧嘩なんてしないでよ……そつじやないとあたし、何も信じられなくなるじゃない！」

そう匠に懇願する珠美は、いつの間にか泣いていた。

「ち、ちょっと…」

いきなりの事に匠は戸惑つ。

「あんなに仲が良かつたのに……だから、あたしも…」

「ま、待つてくれよ、一体…」

「馬鹿つ！」

立ち上がりつてなだめようとする匠の手を振り解くと、珠美は走つて教室から出て行つてしまつた。

「…何ともパワフルだねえ」

前髪をかき上げながら、その後ろ姿を見送つた弘樹がそつ喉く。

「…なあ…」

惚けたように立ちつくし、俯いたままの匠がぼそりと呟いた。

「ん？」

怪訝そうに弘樹が振り返る。

「…『誰でも知つてゐる』つて…」

思い詰めた様子でそつ言いかけた匠を弘樹が呆れたように遮る。
「つたりめーだろ。もしかして、あれで秘密のつもりだったのか？」

「…」

匠は呆けたように無言のまま椅子にへたり込んだ。

「おお、いつお出でなさるの？（前回）

「一日に更新するつもりがすっかり忘れてたっス…（汗）。

夜降つて地固まる？

「…喧嘩、か…」

夕食後、自分の部屋のベットに寝転がり、天井をぼんやりと見つめながら匠はそう呟いた。今まで匠が喧嘩をする相手と言えば千夏くらいで、男友達とも喧嘩することはほとんどなく、まして千夏以外の女の子と喧嘩するというのはおそらく初めての経験だった。

（…やっぱ、謝るべきなのかな…）

確かに、瑞貴が男と一緒に歩いているのを物陰から盗み見ていたのは悪いとは思う。しかし、別に後を追けていったわけでもなく、たまたま見かけて何となく物陰に隠れてしまつただけだ。大体、学校から駅までの道を男とふらふら歩いている方が悪いのだ。見られたくないならもっと別の所を歩けばいい。

それに、学校での一件はどう考えても瑞貴が悪いように匠には思えた。

（…だつたら、向こうから謝つてくるのが筋じやないか…）

じろりと匠は寝返りを打つ。

だが、そういうちが考えているからといって瑞貴の方から謝つてくる可能性は低そうだった。瑞貴はあれで結構頑固なところがあるのだ。

「…先輩、か…」

少し寂しげな、何かを懐かしむような切なげな微笑み。

匠はこの前の瑞貴の表情を思い出す。一体、二人の間には何があるのだろうか。

（…ただの先輩…って感じでもないよな…）

胸が裂けるように、きゅっと痛い。

『例えそうだったとしても、言わないより、言つてしまつた方がいいぜ。言わないまま終わらせると、こつまでも未練が残るからな』

匠は毎晩の弘樹の言葉を思い出し、溜息をついて体を起こした。

「…何言つてゐるのよ、バッカじやない？ そんなんだから…」

冷蔵庫から何か飲み物でも持つてこよつと思ひ部屋を出ると、階段の下から千夏の声が聞こえてくる。じつぜり、電話をしてくるようだ。

携帯電話が一人に一台、といつ御時世にもかかわらず、藤代家にはまだ黒電話が現役で活躍している。父親が何か黒電話に特別な思い入れがあるのか、なかなか買い換えようとしないのだ。そのため、電話をかける時は階段のすぐ下に置いてある黒電話の所で話さなければならぬ。それが、千夏の博文の所への長電話に多少の歯止めを効かせている事は確かではあつたのだが…。

(…電話、か…)

匠はこの前瑞貴の所に初めて電話した時の事を思い出す。あれから一ヶ月位経つが、もちろん、その後電話などかけてはいない。

「…つたく。あ、そろそろ遅いから切るよ。じゃ、もつとしつかりしてよね」

階段を下りていくと、ちよつと電話が終わった所のようだつた。漏れ聞こえてくる言葉からして、相変わらず千夏は博文にあれこれ文句を言つたりしているらしい。だが、それとは裏腹に、にこやかな、少し名残惜しそうな微笑みを浮かべて受話器を置いていた。

「…よく毎日飽きもせずに長電話できるな」

「うつさいわね。どうせお兄ちゃんにはわかんないでしょーよ」

呆れ顔の匠が言つと、千夏はあかんべーをしてそれに答える。だが、その千夏の顔は、はにかんだような、照れくさいようなそんな感じがした。今は、博文との会話の余韻に浸つてゐるのだろう。

「…なあ…喧嘩の後、どうやつて仲直りしたんだ…？」

気が付くと、匠は千夏にそう訊いていた。そして、そう口元に出してしまつた自分に、匠自身が驚く。

「…な、何よいきなり…あ、もしかしてお兄ちゃん、喧嘩したんだ？」

最初キヨトンとした、少しばにかむよつな表情をしていた千夏は、何か思い当たつたのかすぐに悪戯っぽい微笑みを浮かべ逆に匠に訊いてくる。

「な、なに馬鹿言つてんだよ。大体俺にはそんな相手なんか……」
「そつは言つもの、匠は頬がか一つと熱くなるのを感じていた。
きっと、真つ赤な顔をしていることだう。これでは千夏を誤魔化せるとも思えない。

「その顔で誤魔化したつもりー？」

案の定、千夏はまるで信じていない様子でニヤニヤと笑う。

「あたしが特別に相談に乗つてあげるつて。で? どうしたのよ?」

「そ、そんな相手なんかないなって言つてるだり」

匠は必死の抵抗を試みる。が、それが何の役にも立たないことは匠自身が一番よく分かつていた。

「嘘つくんだつたらもう少しマシな嘘をついたら? ……ま、あたしには関係ないから、どうでもいいんだけど」

馬鹿にしたように千夏は肩をすくめてみせる。匠はむつとしたが、普段から立場が弱いので何も言えない。

「でも、クヨクヨしてゐるくらいなら意地張らずにさつたと謝つちやつたら? 『雨降つて地固まる』になるといいけどね」

それだけ言つと、千夏は立ち上がり階段を上つていく。

(… そつは言つけど…)

一人残された匠は頬杖をついて考え込んでいた。このままでは固まる前に土砂崩れを起こしてしまふ様な氣をえする。

「あ、そつだお兄ちゃん」

階段を上つたところで、千夏が小悪魔的な笑顔で振り返る。

「お兄ちゃんの喧嘩した相手つて、瑞貴さんでしょ」

「な……ど、どうして……お前まで…」

かすれた声でそつといつたきり、匠は絶句してしまふ。

「あのね、あれで氣がつかない人がいるとすれば、お兄ちゃんぐらいだよ」

千夏は呆れ顔でそう言った。

それぞれの、空

瑞貴は、その翌日も続けて学校を休んでいた。そのせいか、ますます匠を見る周りの生徒達の好奇の視線は強くなっている。痛いほど視線を感じつゝも、頬杖ほおいりをついて仏頂面ぶつぢょうめんをした匠は教室の自分の席に座っていた。購買や他の所に行って取り敢えずその視線から逃れる、という手もあるのだが、それでは何となく癪にさわるので半ば意地になつて座っているのだ。

（…一日も休むなんて…大分悪いのかな…）

だが、頭の中は瑞貴のことばかり考えていた。

（…電話でも、してみよつかな…）

ぽんやりとそんなことを匠は思つ。だが、今更そんな事はどうてい出来そうもない様に匠には思えもした。

「でも、クヨクヨしてゐるくらいなら意地張らずにさつと謝つちやつたら？」『雨降つて地固まる』になるといいけどね

匠はゆうべ千夏が言つた言葉を思い出す。確かに、喧嘩けんかしたこと

をクヨクヨ思い悩んでも仕方がないのも確かだ。

（…雨降つて地固まる、か…。明日は、来るよな…）

窓の方に目をやると、鉛色の雲が重苦しく立ち込めている。

同じ頃、パジャマの上にカーティガンを羽織つた瑞貴は自分の部屋のベッドの上で上半身を起こし、窓の外を見つめていた。熱は上がつたり下がつたりで、今は解熱剤のおかげで下がつてはいるが、まだ頭がぽんやりとしている。

（…一日目かあ…）

ぽんやりと枕許の時計を見た。ちょうど、午後の授業が始まる時間だ。

（…少しは勉強もしないとなあ…）

瑞貴は視線をそのまま机の上に持つてこぐ。そこにはこいつかの

参考書が積まれてはいるがどれも真新しく、あまり使われてはいない。

（匠も、今頃は勉強してるのかな…）

そんなことをちらりと思つが、瑞貴は慌ててそれを打ち消す。瑞貴は匠を許せないでいた。匠に隆士と一緒にいる所など見られたくないが、瑞貴は喧嘩の発端は瑞貴の不用意な言葉にあることもまた、分かつていた。

（…せめてそれだけでも謝んなくちゃね…）

ぼんやりとそんな事を思つた時、また寒気を感じて瑞貴は身震いする。どうやら薬の効き目が切れてしまい。瑞貴はカーディガンをベットの縁にかけると、布団の中に潜り込んだ。

「…」数日、一人の待ち合わせ場所にしている駅の改札口で、隆士は瑞貴を待つていた。

（…渡瀬の奴…今日も遅いな…）

そろそろ四時になろうというのに、まだ瑞貴は姿を現さない。先ほどまでは瑞貴と同じ学校の生徒がかなり見られたのだが、今はほとんど姿を見かけなくなっている。

『また、逃げられた…？』

隆士の頭にちらりと嫌な言葉が浮かぶ。昨日は待ちぼうけだったのだ。慌ててその言葉を振り払うように、隆士は短い髪をかき上げ、それからタバコに火をつける。

（もう少し…待つてみるか…）

そう思いながらも隆士には何故か瑞貴がもう来ないような気がしていだ。

（…電話番号でも聞いておけば…）

今更ながらに隆士はそう後悔する。引っ越しでもしたのか、隆士が昔知っていた電話番号は繋がらなくなっていたのだ。

（…みんな俺のせい、か…）

隆士は天を仰ぐように天井を見上げ、それから、ふう、と一つ溜

息をついた。

その翌日もまた、はつきりしない天気が続いていた。

(また休んじゃつたな…)

窓の外を見ながら瑞貴はぼんやりとそつ思ひ。今朝は熱も下がつて、かなり良くなつてはいるのだが、どうせだから大事をとつてもう一日休むことしたら、という母親の提案に素直に従つたのだ。ゆっくり気の済むまで寝ていられるし、めんどくさい授業を受けなくて済む。こんな提案なら大歓迎だった。

しかし、瑞貴にとつて何よりもありがたかったのは匠と顔を合わさないで済む事だ。匠に對して謝る必要があることを認めながらも、瑞貴はなかなか気が進まないでいる。

(…何て謝ろうかな…)

いい加減眠るのにも飽きて、暇に飽かせて色々と謝り方を考えてはみるのだが、隆士との事を見られていた、というのが引っかかりなかなかきちんとした謝罪の言葉が浮かんでこない。

(そうよ、匠だつて悪いんじゃない。何であたしだけ謝んなきゃならないのよ)

つい、瑞貴は開き直つてしまつ。だが、それでは何も解決しないのだ。

(…後で、ちよつと電話してみようかな)

匠の電話番号は書いてあつたろうかと、瑞貴は椅子の上に置いてある鞄を取り、その中から手帳を取る。確かに、瑞貴の手帳には匠の家の電話番号が書き込まれていた。

瑞貴は暫くその電話番号を見つめながら、匠と一緒に花火を見に行つた時のこと思い出す。

『…お前の事、…好きなんだ!』

思い詰めたような表情でそう言つた匠。きっと、清水の舞台から飛び降りるような心境だったことだろう。あの時、瑞貴も匠の言わ

んとしている事を、分かつていて。だが、瑞貴には匠の氣持ちにて答えるだけの勇気がなかつたのだ。

（…するよ…あたし…）

心中で瑞貴は匠に謝る。こいつか、ちゃんと匠の氣持ちにて答えられる時が来るのだろうか。例え、どんな答えを出すにしても。

今の瑞貴にはまだその勇気がなかつた。

不意に、飲んでいる風邪薬のせいか眠気が襲つてきた。

「ふあ…」

小さくあぐびをすると、瑞貴は布団に潜り込む。そして、こいつの間にか眠つてしまつていた。

瑞貴は夢をみていた。

雨の中、制服姿の瑞貴と隆士は瑞貴のクリーミー色の傘で相合ひ傘をして歩いている。今回は瑞貴が傘を持っていた。

暫く歩いたところに、紺色の傘をさした男子生徒が立つていた。何かを感じて瑞貴が立ち止まる。

「瑞貴」

不意に、男が傘を少し上に上げる。その男子生徒は匠だ。匠は、思い詰めたような、悲しげな表情をしてくる。

「さよなら…瑞貴…」

やがて、微かに匠がそう呟く。そして、瑞貴の反応を待たぬまま匠はかき消すように消えてしまつた。

「匠…？」

匠に駆け寄るのとした瑞貴がふと気がつくと、隣にいたはずの隆士もいつの間にかいなくなつており、瑞貴は降りしきる雨の中、一人ぽつんと佇んでいた。

傘に当たる雨の音はますます激しくなつていて…。

「雨なんて…嫌い…」

田を覚ました瑞貴はそつなく。外から、また雨の音が聞こえてきていた。

届かぬ想い

仏頂面で頬杖をついた匠は、黒板の前で若い女の先生が何かを話しているのをぼんやりと聞いている。何の授業かはもはや匠の興味から完全に外れていた。

（どうしたんだろ…）

今日何度も疑問が頭に上り、ちらりと右隣の席を見る。そこは、今日も空席のままだった。

（電話、してみようかな…）

三十分おきくらいに、匠はそう思つ。だが、やはり決心が付かずにはいた。今日は土曜なので、電話でもしない限り瑞貴に会えるのは明後日という事になつてしまつ。しかも、それも瑞貴が学校に来れば、の話である。

「…藤代君、聞いてるの？」

「あ、は、はい？…えー、代助は…」

不意に先生の声が脳に届き、匠は反射的に教科書を読み始める。

「…」

一瞬の沈黙の後、教室中が笑いの渦に包まれた。先生だけが、苦虫を百匹ぐらゐ噛み潰したような表情で匠を見ている。

「藤代君？ 今、何の時間が分かってる？」

匠が黒板を見ると、そこには英語の文法の説明が書かれていた。

夕食後、瑞貴は思いきつて匠の所へ電話をしてみることにした。月曜からは学校に行くつもりだったし、謝るにしてもクラスの人たちの目があるところでは謝りにくいからだ。瑞貴は電話の子機を手に取る。

ふと思ひ返してみると、匠の家に電話をするのはこれが二度目だつた。瑞貴は暫く子機のプッシュボタンと手帳に書かれている匠の電話番号を見比べていたが、やがて意を決したようにピピピッ

と一息に番号を押していく。

ゆっくり押していたら途中で手を止めてしまつたのだ。

(お願ひ…すぐこ…出て…)

「 … プーッ プーッ プーッ … 」

だが、願いは届かなかつたようで、無情な話し中の音が瑞貴の想いに答える。瑞貴はすぐに電話を切り、暫く子機を見つめていた。降りしきる雨の中、一人ぽつんと佇む瑞貴。

不意に、耳間見た夢のワンシーンがフリッシュバックする。

「 … 匠… ゴメン… 」

暫く膝を抱えてほんやりとしていた瑞貴は、そつと、そう呟いていた。

(よし、電話しよう!)

同じ頃、机に突つ伏して電話しようか躊躇しようかと逡巡していた匠はようやく意を決し、立ち上がる。だが、部屋を出た所でその決意は脆くも崩れ去ることになつた。

「 でね、今日や… 」

階段の下では、千夏が博文に電話をしていたのである。いつなると、千夏の電話はいつ終わるとも分からぬ。

気が付くと、匠は近くの公衆電話に向かつて駆け出していた。あまり夜遅くには電話することは出来ないので時間がないのだ。しかも、最近あちこちで公衆電話の盜難が相次いでおり、まともに電話が残つているボックスは少ない。

(神様… もう一度だけ…)

匠は祈りながら走る。

だが、匠が知つてゐる唯一のまともに機能してゐるはずの公衆電話は、修理中だった。匠は、その場にへたりこんだ。

そんな匠を、またしとしとと降り始めた雨が濡らしていく。

そして、月曜日

そして、月曜日。

今日もまたはつきりしない天気が続いている。数日ぶりに学校に顔を出した瑞貴は、好奇の視線によつて迎えられた。

「瑞貴、もう大丈夫なの？」

「え？ あ、うん。ホントは、土曜でも大丈夫だつたんだけど、どうせだから連休にしちやつたんだ」

心配そうに尋ねる珠美に、瑞貴はペロリと舌を出し、悪戯っぽく微笑んで答える。匠はまだ来ていなかつた。

（謝らなきや…ね…）

空っぽの匠の机を見て、瑞貴はそう思つ。暫くすると、匠がやつてきた。教室に入つて来た匠は瑞貴がいるのを見て一瞬動作を止めたが、そのまま無視して自分の席に座る。瑞貴も、何となく声をかけられずに時折ちらちらと匠の方を窺うばかりだ。

「あの…」

二人が同時に声をかけ、見事に声がハモつてしまつ。

「あ、う、「ermen…」

謝るのまで同時だつた。顔を真つ赤にして俯いた二人はしばし沈黙してしまう。

「ど、どうぞ、匠」

ややあつて、瑞貴がそつ切り出す。

「い、いや、俺は、別に…」

俯いたままの匠がもごもごと口元もつた。

「…」

そのまま、沈黙が流れる。ふと気が付いてみると、周りじゅうが一人の様子に注目していた。

異様な緊張感が辺りに漂つてゐる。

(「…これじゃあ…）

もはや、何かを言えるような状況ではなかつた。結局、時ばかりが無駄に過ぎ、やがて予鈴のチャイムによつて第一ラウンドの終了が告げられた。

そして、そのまま謝る機会のないまま、放課後になつてしまつてゐた。二人はその後、口々に喋らずにいた。お互ひ、何となく相手の事を意識してしまい、普段みたいに気軽に話しかけられないのだ。その上、他の生徒達も二人のことに注目していく、周りの視線を感じて声をかけるのを止めてしまうことも何度もあつた。

特に、最後の授業は体育だつたため、着替えを終えた瑞貴が教室に戻つた時にはもう既に男子の大半は帰つた後だつた。もちろん、匠もその例外ではない。

(…もう…何でさつさと帰つちゃうのよ…)

瑞貴はがらんとした教室で匠の席を見つめ、しばらく膨れていた。

(つたく…匠の馬鹿…！ もう仲直りなんかしてやらないんだから！)

拗ねてしまつた瑞貴は匠の机の脚を軽く蹴つ飛ばす。ガン、とうくすんだ音が誰もいない教室に響き渡り、すぐにまた静かになつた。

降りしきる雨の中、一人ぽつんと佇む瑞貴。

再び、夢のワンシーンがフラッシュバックする。急に不安に襲われた瑞貴は窓に駆け寄つて外を眺めた。三階の教室の窓の外には相変わらず灰色の曇り空が広がつていた。校庭の方を見回してみると、何人かの生徒達がぱらぱらと歩いている。だが、その中に匠はいないようだつた。

(何考へてるんだろ…いなくなるわけないじゃない…)

瑞貴は一つ溜息をつくと、鞄を持って教室を出る。しかし、教室を出でいくらも行かないつこ、珠美の緊張した声に呼び止められてしまつ。

「瑞貴！ 匠君が、匠君が授業中に倒れて、保健室で寝かされてる

そして、田羅口（後書き）

いよいよHプローグ込みであと2話です。

独特の臭いのする保健室には、まだ眠ったままの匠と、瑞貴の他は誰もいなかつた。窓ガラスには、古ぼけた蛍光灯に照らされた室内が映つてゐる。その外に広がる空は、もう既に濃い藍色から墨色へとその装いを変えつつあつた。

（何でそんな身体で学校なんか来るのよ…）

熱っぽい顔をして、苦しそうに眠つてゐる匠の顔を見ながら瑞貴は心の中でそう呟く。

弘樹の話によると、何だか赤い顔をしてふらふらしていた匠は、体育の時間、バスケットボールを受け損ない、そのまま倒れてしまたかに体育館の床に頭をぶつけたのだといふ。保健室に運ばれてから熱を計ると、四十度近かつた。どうやら、風邪をひいていたようだ。

（…どうか…神様…）

瑞貴は目を閉じて祈つていた。

外は、雨が降つていた。

静まり返つた隆士の部屋に、外の雨の音が微かに聞こえてきている。

「瑞貴…」

隆士のしなやかな手が瑞貴の頬に伸び、くいつと優しく持ち上げる。瑞貴は内心の恐怖感を閉じこめるよつて、きゅつと目をつぶつた。心臓の鼓動がうるさいぐらい耳に響いてゐる。

間近に迫つた隆士の息づかいまでもが感じられ、座つてゐる隆士のベットが微かに軋んだ。

（…）

目をつぶつたまま息を潜め、その時を待つ。だが、いよいよどう所で急に瑞貴は顔を逸らした。

「…瑞貴…？」

隆士が、非難と驚きの入り交じった声を上げる。

「「」、「めんなさ」…あたし、やつぱつ…」

涙が出来たになるのをじらえながら、瑞貴はやつとの事で声を絞り出す。

「…何だよ、それ…お前、俺の事…」

傷ついた表情で隆士が非難する。

「「」、「め…先輩…」

涙を堪えて謝る瑞貴。だが、とうとう堪えきれなくなり、泣き出しだ。

「いいよ。分かった。帰れ」

吐き捨てるようにしゃづと隆士はそっぽを向く。

瑞貴は鞄を掴むと雨の中を泣きながら駆け出していく。クリーム色の傘は隆士の家の玄関に忘れたままだつた。

「「めんなさい…」「めんなさい…」

雨の中を泣きながら走る瑞貴はずつとしゃづ咳き続けている。その後ろ姿を、今の瑞貴と匠が見つめていた。

「さよなら…」

悲しげにそう咳くと、ぐるりときびすを返し匠はどんどん先へ行つてしまつ。

「待つて…！匠…！あたし…」

だが、瑞貴がいくら追いかけても、匠に追いつくことはできない。伸ばした手がむなしく宙をつかむばかりだ。

「匠…！匠…」

「…い…おい、瑞貴…どうしたんだよ…」

そこで、瑞貴は目を覚ました。どうやら布団に突つ伏して眠つてしまつていたようだ。側には布団から上半身を起こした匠が呆れ顔で瑞貴を見つめている。

「つたぐ、どうも寝苦しいと思つたら、お前が上に乗つてたのか」

そう言ひながらぱりぱりと頭をかいていた匠の動きが、止まった。

瑞貴が震えながら泣いていたのである。

「瑞貴！？ お、おい、どうしたんだよ……」

「匠……」

泣きながら瑞貴は匠に抱きついていた。

「……な、何か怖い夢でも見たのか……？」

戸惑いながらも匠はそつと瑞貴を抱きしめる。甘いシャンプーの香りが、ふうわりと漂つた。

そんな所に瑞貴もやつぱり女の子なんだな、と、匠は妙に納得してしまう。背は結構高いのに、華奢な体つきをしていてぎゅっと抱きしめたら折れてしまいそうだつた。

「ばか……いなくなっちゃうかと思つたじやない……」

「な、何言つてんだよ、そんな事ある訳ないだろ」「うん……」

匠の胸に顔を埋めたまま、瑞貴は暫く泣いていた。匠は心の底から瑞貴のことを可愛いと思つた。想いを、伝えたかった。

「瑞貴、俺……自分勝手かもしれないけど……」

暫くしゃくり上げる瑞貴の背中を見つめていた匠は、やがてそう切り出す。

「でも、言わないときつと後悔すると思うから……言ひよ」

そこで一度口をつぐみ、何かを覚悟するように一呼吸して続ける。

「俺……お前の事、好きだ。友達としてじゃなく、一人の女性として

驚いて瑞貴は顔を上げた。

「匠……あたし……」

瑞貴が何かを言いかけ、つらそうに俯く。

「いいよ……分かってる。他に、いるんだろ……好きな人が……」

目を伏せた匠はそう応えた。暫く、沈黙が流れる。

「匠……あたしね……昔、付き合つてた人がいたの……」

暫く後、瑞貴がそう言つた。

「……そう。匠がこの前見た人がその人……でも、その人が……その人

「瑞貴…」
「…」

「聞いて、匠」
「…」

何かを言いかけた匠を瑞貴は遮るが、やつきの夢がちらつと瑞貴の脳裏をよぎり、一瞬躊躇してしまう。だが結局、瑞貴は全てを話すこととした。正直に自分の気持ちを伝えてくれた匠に応えるにはそれしかないようと思えたからだつた。

「…その人が、キスしようとした時…逃げ出しちゃつたんだ…怖くて…」

瑞貴はまた肩をふるわせて泣いていた。

「…それ以来ずっと…怖かった…。人を…好きになる事も…恋人として誰かと付き合つ事も…」

そこで瑞貴は一息ついた。それから、一つ深呼吸して、今度ははにかんだよつに明るく続ける。

「でも、今度ね、また、付き合つてもいいかなつていう人が、出来たの」

「そう…」

匠はつらそうに俯く。予想していた答えだった。せめて、笑顔で送り出してやろうと思つたのに…。匠は、そうできない自分が、悔しかつた。

「匠？」

俯いてそっぽを向いてしまつた匠を見て、瑞貴が怪訝そつな顔をする。

「「ゴメン、ちゃんと…、送り出してやろうと思つたのに…俺…」
「どうやら、匠にははつきり言わなければダメらしい。瑞貴は呆れる思いだつた。

「匠、こっち向いて」

「な、何だ…」

不意の命令口調に振り向いた匠の唇に、柔らかい感触が触れる。同時に、ふつわりと甘いシャンプーの香りが漂つた。

「…」

「匠…あたしは、匠の事が…」

田を白黒させる匠から唇を離した瑞貴が何かを言いかけた時だつた。

ガラッ！

いきなり、勢いよくドアが開き、千夏が入ってくる。そして、い
い雰囲気になつていてる匠と瑞貴を見て、素つ頓狂な声を上げた。

「あーつ！！ お兄ちゃんつ！ 一体何やつてるのよつ！！」

附白（後書き）

次はエピローグです。お付き合いありがとうございました。

ヒュローグ～雨上がりの風に向かって～

その翌日、匠は学校を休んだ。
たが、夕方頃にはどうにか止んでいた。

放課後、瑞貴は駅へ向かう。気は重かつたが、そのままにする訳にはいかない。それに、そうする事によつて自分にもけじめを付けたかった。

駅に着いた瑞貴は、隆士の姿を探す。案の定、隆士はいつもの場所にいた。

「あ、何日も人に待ちぼうけ食わせやがつて。ビリしたんだよ。また逃げたのかと思つただろ」

瑞貴を見つけた隆士が笑いながら声をかける。「また逃げた」と言う言葉が、痛かった。

（そう…あたし…ずっと逃げてたんだ…あの時から…）

「瑞貴？」

俯いて黙つてしまつた瑞貴に、怪訝そうな顔で隆士が呼びかける。「先輩…ごめんなさい…」

一つ深呼吸した瑞貴は、そう切り出す。隆士の笑顔が、凍り付いた。

「…もう、お付き合いできません…」

暫く、一人とも黙つたままだつた。通り過ぎる人々が、まるで絶えることのない時の流れのようで、その流れから取り残されてしまつた二人の周りを足早に過ぎていいく。

「…分かつた」

やがて、溜息をつき、たつた一言そう呟くと隆士は髪をかき上げるような仕草をした。そして、くるりときびすを返すと、そのまま振り返ることもなく改札をくぐり、人混みに紛れて見えなくなつていぐ。

（さよなら…先輩…）

その後ろ姿を見送っていた瑞貴は心の中でそつと呟く。それから一つ溜息をつき、駅を出た。少し、歩きたかったのだ。

瑞貴が空を見上げると、厚い雲の切れ間から茜色の夕日が覗いていた。そして、その光が周りの雲を同じ色に染めている。

明日は、晴れるだろうか。

不意にそんな疑問が頭をよぎる。それから、急に可笑おかしくなつてクスリと笑つた。

（きっと、晴れるよね）

瑞貴は、千夏に『我が兄ながら情けない』などと小言を言われながら帰つていった匠の事を思い浮かべる。

「…」

ふと、そう呟いていた自分に気付き、瑞貴ははにかんだように笑つた。それから、雨上がりの風に向かつて、しつかりとした足取りで歩き出す。

少し、肌寒くはあつたけれども。

終

ハローク～海上がりの風に向かって～（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

実のところ作品そのものとしてはセピアの第三話に次ぐ古文、1998年作です（汗）。そういうた書きためていた話もそろそろ底をついてきた事ですし、そろそろ新作も発表したいなあと思っています。

そんな気持ちになりましたのも皆様のアクセスや感想のおかげです。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442i/>

三/年/目2 雨上がりの風に向かって

2010年10月8日15時26分発行